

多芸郡龍泉寺村（養老町）の「文久3年（1863）酒（坂・境）迎えの習俗に関する史料」を読む

1 今回読む史料

- ・龍泉寺村の西脇家文書（岐阜県歴史資料館所蔵）のうち、名主西脇李三郎作成の「文久三癸亥年 正月十四日立同廿日下向 三人之者参宮酒迎諸事覚 西脇李三郎扣」
- ・テキストは、伊勢参宮に出かけた三人の若者が村へ帰参した際の酒（坂・境）迎えに関して、方針決定の経緯、準備の手順と経過、当日の様子等を覚として記録したもの。

2 西脇家文書について

西脇家文書は、美濃国多芸郡龍泉寺村（明治22年<1889>に他の8か村と合併し養老村。現在は養老郡養老町大字龍泉寺）の名主であった西脇家に伝わった文書で、近世文書347点、近代文書416点、計763点からなる。西脇家が名主を務めるようになったのは、貞享5年（1688）とみられ、以後明治初年まで名主役を務めることが多かったようである。明治5年（1872）以降は戸長として村政の中心を担った。

近世文書には、寛永4年以後のものが幕末まで特定の時期に偏らずまんべんなく残る。特徴としては、婚礼や出産、元服等にかかる祝儀帳、病氣見舞い帳が多く残り、中でも疱瘡見舞い関係の史料は、当地の疱瘡をめぐる習俗を知る上で意義がある。

近代文書のうち8割弱を占める領収書は、大半が明治34年から大正2年（1913）までの13年間に集中する。日本の産業革命の進展とともに、流通経済が地方の農村にも急速に広がりゆく時期の具体的な浸透状況が分かる資料である。

3 龍泉寺村について

養老町の中心市街地（高田・島田・押越）の西方、養老山脈の東麓の扇状地に立地する集落。標高70～80mのあたりを北北西から南南東へと旧伊勢（東）街道が通っていた。

村名は、かつてこの地に大威徳山竜泉寺が栄えたことによる。天平宝字年間（七五七～七六五）の創建と伝えられ、多芸七坊の一つに数えられたが、織田信長の兵火にかかり廃寺となった。近世は、高須藩徳永氏領、幕府領を経て、寛永12年（1635）から大垣藩領。村高は「慶長郷帳」121石余、「正保郷帳」126石、「天保郷帳」215石。

明治5年（1872）「村明細帳」では戸数27、人口125人、牛4。同22年押越村・勢至村等8か村と合併し養老村となる。昭和29年（1954）の養老町の成立により、同町の大字となる。

（『角川日本地名大辞典 21 岐阜県』（角川書店 1980）、「日本歴史地名大系 21 岐阜県の地名』（平凡社 1989）」

4 語句解説

参宮 神社に参詣すること。特に伊勢神宮に参拝すること。

酒迎 境迎え、坂迎え、あるいは祝宴が伴うので酒迎えと記すことも多い。古くは平安時代に新任国司が任地に赴任する際、国府の官人たちが国境まで出迎えて歓迎の酒宴を催す慣習があり、これを境迎え、坂向えといった。中世の公家の日記には、熊野や伊勢へ参詣した者が帰着する際の御坂迎え、酒迎えの記事も見られ、盛んにおこなわれた習俗であることがわかるが、主として伊勢参宮に関するものである。

近世以降の村方文書には、坂迎えに関する史料がしばしば見受けられるが、その多くはやはり伊勢参宮に関するものである。

同者 「道者」「同社」とも書く。

(1) 仏道を修行する者。僧。道士。

(2) 社寺・霊場へ参詣・巡拝する旅人。多く、連れ立ってでかけたことから、道連れ、同伴の者の意ともなった。

割賦 (わっぷ、かっぷ) 支払いを何回かに分けてわりふること。

諸色 いろいろの品物。転じて物価の意。

村南野 村南の野原・耕地といった意味。

談 相談

養老河原 東に隣接する押越村の小字名に北川原、南川原がある。烏江湊とも考えられるが、かなりの距離がある。

下方(したかた) 身分が低いこと。また、その人々。世間の人々。

仕込み 商店などで、商品や材料を仕入れること。

然 その通り。しかり。

料理宿 酒迎いの料理を調理する家。

頭分 頭百姓の事。頭百姓は一般的には江戸時代の村役人など上層の農民を意味するが、特に美濃国では脇百姓・下百姓と峻別した上位の家格をもつ農民をいう。

頭百姓は苗字を有し、その苗字にちなんで某党(統)・某姓・某衆と称する同族団を形成し、村内の頭百姓同族団の数によって、一姓・三苗・五苗・八姓などと称した。頭百姓と脇百姓との間の身分差別は厳しく、頭百姓が村役人の役職を独占して村方政事を握り、宮座を結成して村方の祭祀を主宰し差配した。

脇百姓は苗字を禁ぜられ、門・玄関・高塀・天井・縁・白壁・色壁・瓦葺屋眼・庇・土蔵など頭百姓と同様の家作を許されず、峠・羽織・袴・白無垢・輿・火屋など冠婚葬祭上のみならず、日常生活上の厳しい制限をうけた。頭百姓は脇百姓を呼び捨てにし、戸前で履物を脱かせ、道では土下座させたり、脇百姓とは通婚しなかった。

頭百姓は筋目正しい家柄を誇り、室町・戦国時代には脇百姓を家来としていた武士であったとする場合が多い。頭百姓の系譜は小領主・土豪、あるいは村の草分百姓で、多くの田畑や林野を持ち、そのうえ有力な頭百姓は共同用益する灌漑用水や入会林野を管理する権能を有していて、その政治的・経済的・社会的地位は強固であった。しかし、十七世紀後半以降、脇百姓のなかには次第に勢力を伸ばし、頭百姓・準頭百姓として身分昇格を獲得する者もあらわれ、また、脇百姓が頭百姓と抗争することが多くなった。

(『国史大辞典』第3巻 吉川弘文館 1983)

煎付 煎り付け。調理法のひとつで、水気のなくなるまで煮つめ、食材に味をしみこませること。

人餐 「人参」のことか。「餐(さん)」は「参」と同音であることからの当て字か。

に付 「煮付け」のこと。最初から少量の汁で甘辛く、煮汁が少し残るまで濃く煮た料理。煮しめより短時間。

遣(つか)ひ樽 酒迎いのために村などから贈った酒樽といった意か

柴多 東吾 大十郎 柴多は弘化4年(1847)出生、東吾は嘉永4年(1851)出生、大(代)十郎は安政3年(1856)疱瘡植直しの覚え帳が残る。

捨 天保14年(1843)の出生覚え帳が残る。

おつよ 天保12年(1843)の披露の記録(惣酒呼献立 座敷献立)、祝儀覚帳が残る。

御祓い 神社から出す災厄除けのお札。特に、伊勢神宮の大麻をいう。また、それを入れる箱。

切手 「切符手形(きりふてがた)」の略で、金銭を受け取った証拠となる書類や金券を意味し、江戸時代には商品券のような役割も果たしていた。とうふ切手はいわば豆腐と交換できるギフト券。

見廻り 見舞いの意か。

5 サカ迎えについて

(1) 概要

伊勢参宮や四国遍路など遠方の社寺参詣の旅をした者が帰参するときは、家族や村人らがこれを村境まで出迎える風習があり、これを「サカ迎え」といった。西日本では「ドウブルイ」、東日本では「ハバキヌギ」、「スナタタキ」ともいった。とくに伊勢参宮に広く見られた習慣で、酒食を持参して、出迎えた場所で饗応の共同飲食を行った。そのため「酒迎え」と理解されたり、またそうした場所がしばしば坂の地形であったりするため、「坂迎え」ともされたが、本来は村境まで出迎えるという意味で「境迎え」であった。

桜井徳太郎は、サカムカエの民俗には次の4類型があるとしている。

- ①村人が村境まで出迎えに行き、出会った所で酒食を饗する共同飲食型。
- ②抜け参り型参宮の出迎えには、華やかな装いをこらした馬に本人をのせ、神歌などを唱いながら賑やかに村入りする（嫁入りの出迎え場合にもみられる）。
- ③参籠型で、帰参者がすぐに家へ帰らず一夜を鎮守社、精進屋、行屋に籠る。
- ④帰参者が物忌みの仮屋に入り、その仮屋に火を放ち、燃えるなかを飛び出して村人に挨拶をする。

(2) サカ迎えの目的や意義について

次のような見解がある。

- ①共同飲食により無事旅から帰還したことを祝い、慰労する（一般的な民俗伝承）。
 - ②共同飲食は体力の回復ということだけでなく、旅という非日常の生活から日常の生活へ戻るための一種の通過儀礼的な意味。（佐々木勝）
 - ③・境界外で強い靈威に接した者たちが、聖空間から俗界へ還帰するための境界儀礼であった。（桜井徳太郎）
 - ・（境迎えは）神と同格の地位におかれた代参者が、ふたたび人間に立ち返る行事であり、場所であった。またそこで神と同席しながら共食し、それから改めて普通の人間の状態に戻るという祭りの重要儀式の一つとみなさるべきものであろう」（桜井徳太郎）
 - ④部落の境、峠や道路の界から、気ままで気まぐれな護法（旅の道中でからだに憑いた精霊－護法－）が、部落生活や家庭生活にはいつてきて、憑いたりするのを（共同飲食をすることでもてなすことで、帰還者から分離し）ここに留めておこうとしたのである。（近藤喜博）
- 以上の見解を踏まえて、その民俗学的意味をまとめると以下のようになると思われる。

村境には、サイ（塞）の神、道祖神、ドウロク（道陸）神、フナドガミ（岐神）などと呼ばれる境界神がいて、外部から村落へ侵入する疫神や悪霊などをふせぎ止めたり、追い払ったりして、村落の安全を守護していると信じられていた。また、境界神は旅の神、生殖の神としても信仰される。境界での共同飲食は、境界を守る神をもてなす宴であり、外界から帰還する者の旅の途上を守護してもらえたことの感謝を表すとともに、聖性を身にまといながらも、一緒に邪悪な精霊をも引き連れてきた帰還者から、招かざる悪霊のみを引き離し追い払ってもらうための祈願の意味も込められていた。

(3) 養老の伊勢講のサカ迎え（以下は『養老町史 通史編下』養老町 1978）

高田 石畑まで送り迎えに出た。この時に参拝者を神馬（御幣を飾った馬）に乗せた。

栗笠 毎年4人が代参。舟付湊まで乗馬一頭、花馬二頭を用意し出迎えた。花馬は鞍の中央に桜の造花をたくさんつけた2mほどの細竹を30本くらい束ねて挿し、それが噴水状に広がっていた。鈴も付けて有歩くたびにチャンチャンと鳴った。初参りの代参者が馬に乗り、出迎えの一行は、伊勢音頭を歌いながら、村の東の入口の市神神社に参拝、町通りを西進して、西の入口の須賀神社に参拝、その後氏神の福地神社に参拝して、代参道中は終了する。その後代参宿へ入り、来年度の代参者をくじ引きで決定し、その後、新旧の第三者の家から各一重持ち寄った料理で祝宴を開いた。